# 驚きの感動詞「バ」

小林　隆
澤村美幸

## 1. 調査の趣旨

感動詞のひとつに、「アバ」とか「バ」といった形式をもつものがある。これらをアバ系感動詞と名付けておこう。アバ系感動詞はある種の驚きを表すものであるが、現代共通語ではほとんど使用されず、「いないいないばー」や「べろべろばー」など、きわめて慣用句的な表現にその痕跡を残しているにすぎない。しかし、この感動詞は、別れの挨拶「あばよ」を生み出すとともに、西日本では美しさを意味する形容詞「あばい」に姿を変え、一転して近畿では汚さを表す「ばばい」を、東日本では同じく「ばばっちい」を生成したものと思われる。そして、なによりも興味深いのは、このアバ系感動詞こそが「もののあはれ」の「あはれ」の語源であり、同時に「あっぱれ」の源泉とも目されることである。

日本語史や方言形成史の視点から見たとき、アバ系感動詞はかくも魅力に満ちている。その歴史的変遷を追い、地理的展開を明らかにすることは、われわれにとって興味深い課題と言える。[注1]

ところで、中央語の歴史から姿を消したアバ系感動詞は、現在、各地の方言の中に息づいている。『日本方言大辞典』や東北大学で行った「消滅する方言語彙の緊急調査研究」のデータによれば、東北および九州・琉球列島を中心に、いくつかの地域から使用の報告がなされている。東北の中では、とりわけ今回の調査地域である三陸地方南部でよく使われる形式のようである。

2007 年度の調査結果から、アバ系感動詞の分布を示してみた。図をご覧いただきたい。海岸部を中心にこの感動詞の使用地点が広がっていることがわかる。一方、内陸部、および海岸部でも釜石周辺にはこの感動詞は行われていない。なお、図では「アバ」と「バ」をまとめてアバ系感動詞の分布としたが、実際には「バ」を使用する地点がほとんであり、「アバ」は少数の地域からしか回答されなかった。

図　アバ系感動詞の分布

さて、アバ系感動詞の歴史的・地理的展開を明らかにするためには、中央語史との対比や分布論的な考察のほかに、各地におけるこの感動詞の用法について詳しく知る必要がある。この報告では、そのような作業の一環として、2006年度に行った気仙沼市多人数調査の結果について分析する。

なお、気仙沼市においても、「アバ」の回答は少なく、「バ」が主流であった。用法を比較してみても、両者には特に違いが認められない。以下では、この感動詞の表示を「バ」で代表させておく。

## 2. 調査項目の内容

まず、この調査で用いた調査文を示しておこう。次のとおりである。

**【調査文】**

○それでは、次に、驚いたときの叫び声について教えてください。

1．ぼんやりと歩いていたら、誰かに急に背中を押されました。そのとき、驚いて何と声を上げますか。例えば、**「バッ」**とは言いませんか。【驚き】

a．言う　→　実際にどのように言うか、実演してみてください。

b．言わない　→　それでは、そういうときは、どんな声を上げますか。

2．驚いた拍子に、手に持っていた花瓶を床に落としてしまいました。花瓶は割れませんでしたが、水がこぼれてみるみる床の上に広がっていきます。そのとき、慌てふためいた感じで、何と声を上げますか。【慌て】

2－1．例えば、**「ババババ」**とは言いませんか。

a．言う　→　実際にどのように言うか、実演してみてください。

b．言わない

2－2．それでは、そういうときに、**「サーサー」**とは言いませんか。

a．言う　→　実際にどのように言うか、実演してみてください。

b．言わない

2－3．(「ババババ」も「サーサー」も出ない場合)

→　それでは、そういうときは、どんな声を上げますか。

3．それでは、花瓶が割れてしまった場合はどうでしょう。大事にしていた花瓶です。割れた花瓶を見て、がっかりした気持ちで、何と声を上げますか。【落胆】

3－1．例えば、**「ババー」**とか、**「バーバー」**とか言いませんか。

a．言う　→　実際にどのように言うか、実演してみてください。

b．言わない

3－2．それでは、そういうときに、**「サーサー」**とは言いませんか。

a．言う　→　実際にどのように言うか、実演してみてください。

b．言わない

3－3．(「ババババ」も「サーサー」も出ない場合)

→　それでは、そういうときは、どんな声を上げますか。

ご覧のとおり、この調査においては、同地域で使用される失敗の感動詞「サーサー」についてもあわせて取り上げた。しかし、それについてはまた機会を改めて報告することにしたい。

さて、以上のように、質問は3つの柱から構成されている。質問1は単純に驚く場面、質問2は慌てふためいて驚く場面、そして質問3は落胆の気持ちで驚く場面、といった意図で用意した。これらの場面の違いによって、「バ」がどのように使用されるかを見ようとした。

実際の調査においては、話者から「バ」を使った例文が多数得られた。中には、設定した質問以外の場面についての用例が得られることもあったが、この点は、調査項目数の制約の中で、「バ」について全体的に考える貴重な手がかりとなった。また、「バ」の使用条件について、話者の内省を豊富に収集することもできた。それらの話者の意識は、「バ」の用法について考える上で重要な示唆を与えてくれた。以下では、そうした話者の回答内容を引用しながら検討を進めていくことにする。

気仙沼市調査の話者は、4 世代にわたる 74 名である。回答の引用においては、〈話者 2〉〈話者 13〉のように番号で示した。話者と世代との対応関係は次のとおりである。

高年層：〈話者 1〉～〈話者 22〉
中年層：〈話者 23〉～〈話者 39〉
若年層：〈話者 40〉～〈話者 54〉
高校生：〈話者 55〉～〈話者 74〉

一般の方言形と同様、世代が下がるにつれて「バ」の使用は衰退する傾向はあるものの、若い世代の中にも「バ」をよく使用し、内省も的確に行える話者が多数いる。全体として、気仙沼市の「バ」はよく保たれていると言える。また、用法の世代差も特に認められない。したがって、以下の考察においては、世代差や性差を考慮せずに結果を扱うこととする。

あらためてこの報告のねらいを述べるならば、気仙沼市の「バ」という感動詞が言葉としてどのような性質をもつのかを明らかにするということである。分析の手順として、最初に「バ」の意味について考察し、次に形態について検討する。最後に「バ」が使用される文の特徴を取り上げる。

## 3.「バ」の意味

### (1) 質問1の場面では使用されにくい

まず、全体を概観すると、質問2・3では「バ」が回答されやすいが、質問1はそうではなかった。実際には74名の話者のうち、質問1で「バ」を使用するとしたのは14名にとどまった。しかも、それらの中には、話者が調査場面を確実に理解しているか、やや疑わしいものも含まれている。この場面で「バ」を使用すると回答した話者のうち、使用例が得られているものを挙げてみよう（「／」で仕切ったものは、複数の回答が得られた場合である）。

〈話者 2〉バッ　ナンダベ　オラ　タマゲタヤ。
〈話者 13〉バッ　オッカネコト。／バッ　アブネコト。
〈話者 16〉ババババ　ナント　ビックラコイタヤ。／ババババ　ナンダベ　イギナリ　コエカケ

テ　ビックラコイタコト。

〈話者 18〉バッ　ナニスンダベ。／バッ　コノヒト　ナニスンダベァ。

〈話者 23〉バー　タ゛マケ゜ダ。

〈話者 27〉バッ　ナンダベ。／バババババ　ナンダビャー。／バババババ　ナンダベヤ　アンダダッタノスカ。

〈話者 32〉バッ　ナン　オメガ。

〈話者 48〉バッ　ナニスンノー。

この質問 1 は、前節で調査文を示したように、急に背中を押されたという場面であり、言わば生理的な反応として反射的に発する驚きの声を聞き出そうとしたものである。しかし、これらの例文の中には、咄嗟の反応ではなく、わずかに間を置き、加害者の方を振り向いて発するのではないかと思われるものが多い。特に、〈話者 18〉の「コノヒト　ナニスンダベァ（何をするつもりだ）」、〈話者 27〉の「アンダダッタノスカ（あなただったのですか）」、〈話者 32〉の「オメガ（お前か）」といった語句は、その例文の発話が、自分を押した相手に向けて発せられたものであることを示している。そのように見ると、場面 1 でアバ系感動の使用を肯定した話者たちの多くは、回答の際、反射的な場面を想像するのではなく、振り向いてこの感動詞を発するイメージを抱いていたのではないかと思われてくる。

**(2)「バ」は反射的な反応ではない**

一方、このような場面では「バ」は使用しないという話者の回答を見てみよう。

〈話者 3〉もう少し余裕があるときに言う。この場面では言わない。

〈話者 5〉言うかもしれないが、ニュアンスが違う。

〈話者 53〉バは驚かされたときには使わない。

〈話者 69〉バは後ろから押されたときではない驚きだったら使用する。

これらは、別の驚き場面であるならば、「バ」を使用する可能性を示唆している。もう少し、具体的な説明が加わった回答を挙げてみる。

〈話者 12〉それは後で誰だかわかったときには、バー、と言うが、押された時には使わない。ナンダベ、と言う。

〈話者 37〉後ろからやられたときは、オッ、人に会ったときには、バッ、と言う。意外な人、久しぶりに会った人、本当はそこにいないような人がいたときに、バッ、と言う。後ろから押された場合には言わない。

〈話者 38〉回り込んでみて知っている人だったときに、バッ　ナンダベ、と言う。突然びっくり

したときには言わない。次の段階で、軽い非難を込めて確認するみたいな感じだ。

〈話者 39〉バは瞬間的なびっくりを表すのではなく、何かを見ていての反応だ。驚かされて、ワッ、という感じではない。

〈話者 47〉使うが、こういうときは使わない。ウオッ、とびっくりして振り向いて、相手を見た瞬間に、バッ、と言う。振り向いてこの人だとわかったときに、バーー、と言う。咄嗟には出てこない。

以上のようにさまざまな内省が得られているが、これらに共通するのは、「バ」が反射的な反応ではなく、相手を目視してから発する声だということである。上で、〈話者 3〉が「もう少し余裕があるときに言う」と述べていたが、ここでも、〈話者 38〉の「突然びっくりしたときには言わない」、〈話者 39〉の「バは瞬間的なびっくりを表すのではない」、〈話者 47〉の「咄嗟には出てこない」といった内省に共通の感覚がうかがえる。おそらく、振り返って相手を確認するという少しの間が、〈話者 3〉の言う「余裕」という意味なのだと思われる。

### (3) 「バ」は何かを見て発する声である

ところで、反射的な反応ではなく、自分を驚かせた相手を目視した上で発するということは、「バ」の使用には、事態の観察という条件が必要なのではないかと考えられる。質問 1 に比べて質問 2・3 で使用するという回答者が多かったのは、それらが、床の上に広がる水の様子（質問 2）や、割れた花瓶（質問 3）を見るという、何らかの観察を伴う場面設定であったためであろう。ここで、質問 2・3 にも範囲を広げて、その点と関連した回答を拾い上げてみよう。

〈話者 10〉保育所などで、子供がおもらししたのを見て、バーーー、バッ、バーバーバー、などと言う。落っことしちゃったときには瞬間的に、アッ、と言うけど、状況を見たときは、バーバー、と言ったりね。

〈話者 12〉バーババ、と言うのは、たまげたときだから、それは見たことのときだ。ババババ、というのは、例えば、洗濯機の水が忘れて出しっ放しになっているのを見たときに、ババババババ、と言う。何か見たとき言う。

〈話者 16〉しばらくぶりに来た子供たちに、ババ　ヨグキタコト、と言う。

〈話者 20〉バーババババは人さまのやったのを見て言う。自分は被害者の立場。

〈話者 22〉バはびっくりしたとき、驚いたときに、いろいろな場面で使うが、後ろから押されたような場面では使わない。例えば、ここに水こぼしたときに、ババババ　ミズコボシテシマッタヤ、などと言う。

〈話者 22〉バヤバヤバヤバヤ　オメサン　ナンダベ、というのは、あっちの誰かがやったりなんかしたときの言い方だ。

〈話者 26〉子どもたちがお湯なんかこぼしたときは、バーバーバーバー、と言う。人がやったの

を見て言う。

〈話者 30〉まず、こう水をこぼした段階で、アッと、言うだろうね。アッ　バッ　ナゾスッペ、という感じだ。ナゾスッペはドースッペという意味だ。アッはやってしまったことに対する驚きのアッだ。一呼吸おいて、バッ　ナゾスッペ、という感じだ。状況を見た状態で発する。ひっかけて倒したときにアッ。そして、そいつを片づけなければというときに、バッ　ナゾスッペ、と言う。

以上の回答には、その場の状況を「見て」発するというものが多い。子どもがおもらしをした様子、あるいは、水が出しっ放しになっている状態や水・湯をこぼしてしまった状態、さらには、久しぶりにあった孫たちの様子などを目撃した上で「バ」が発せられることがわかる。

ところで、中には、「バ」は自分のことには使用しないと答える話者もいた。

〈話者 3〉ババババは、人がやった時に言う。自分がやった時ではない。怒る寸前、こっちがどなりつけたいときに言う。

〈話者 10〉相手がやったときに、バーバーバーバー、と言う。自分がやった時は使わない。自分がやった時は、サーサーサーサー、と言う。

〈話者 26〉自分がやったとき言わない。

〈話者 51〉自分がやったら、サササササ、誰かがやったら、バババババ。

「バ」の使用条件に観察という要素が入るとすると、自分自身のことよりも、自分を含まない外界の状況について使いやすいことは確かであろう。しかし、これが絶対的な制約かというと、そうではないと思われる。ひとつには、この調査が失敗の感動詞「サーサー」と組み合わせて行われており、その「サーサー」が自分自身の失敗についてのものであるために、勢い、「バ」を自分以外と位置付ける意識が働いた可能性がある。また、このように、自分のことには使用しないと言う話者はかならずしも多くなく、次のように、自分のことがらについての使用を明言する話者もいる。

〈話者 69〉コップに注いだジュースを誰かがこぼしたら、アババババババ、と言う。アババババナニヤッテンダベ、と。（調査者：あなた自身が花瓶を落として水がこぼれたときも言いますか？）こぼれてしまったということを認識してからなら言う。

### (4) 「バ」は何かを聞いた時にも発せられる

上では、「バ」は何かを見たときに上げる声であり、「観察」という要素が使用条件に入ることを指摘した。しかし、そのように言ってしまうと、話者の次のような内省が気になってくる。

〈話者 19〉バーバー　ナントヤー　ソンナコトカタッテ。／バーバー　ソンナコトユッテ　コマンデネーノ、といったように使う。

〈話者 49〉話をしていて、予想以上のことを話された時に、バッ、と言う。バッ　ソンナニ、とか言う。

〈話者 60〉普通の会話をしていて、なんか、こうびっくりすること、初めて聞いたこととか言われると、バーー、とか言う。

これらの回答は、いずれも会話の相手から聞いたことがらに対して「バ」を使用することを述べている。すなわち、「バ」はかならずしも「見る」という行為によってのみ発せられるものではなく、「聞く」という行為によっても使用可能であることを物語る。そうなると、「バ」の使用条件として「観察」というまとめ方は適切ではない。ここでは、見ること、聞くことの両方を含めて、「認知」という用語を使っておきたい。何らかの事態を目や耳を通じて把握すること、すなわち、認知することが「バ」の使用条件になると考えられるのである。

なお、視覚、聴覚のほかに、味覚や触覚など他の感覚によって事態の認知がなされる場合にも「バ」の使用は可能であることが予想される。それらの場合については、今後確認が必要である。

**(5) 認知される事態は想定外のことである**

さて、「バ」は何らかの事態を認知したときに発せられる。しかし、「バ」の意味を説明するにはそれだけでは不十分である。事態の認知は、いついかなるときも行われるものであり、いわば人間にとって当たり前の行為だからである。それでは、「バ」を発する際の事態の認知とはどのようなものであるのか。これを考えるときに、そもそも、「バ」は驚きの感動詞であることを前提に検討しなければならない。つまり、どのような状況下で驚くことが、「バ」の使用につながるのかということである。

このことを考えるヒントは、すでに、ここまで見てきた話者の内省の中にある。あらためて、3つの回答を示してみよう。

〈話者 37〉後ろからやられたときは、オッ、人に会ったときには、バッ、と言う。意外な人、久しぶりに会った人、本当はそこにいないような人がいたときに、バッ、と言う。

〈話者 49〉話をしていて、予想以上のことを話され時に、バッ、と言う。バッ　ソンナニ、とか言う。

〈話者 60〉普通の会話をしていて、なんか、こうびっくりすること、初めて聞いたこととか言われると、バーー、とか言う。

以上からは、「意外な人」に出会い、「予想以上のこと」「初めてのこと」を聞いたときに「バ」が発せられることがわかる。すなわち、想定外の事態を認知したときの驚きが「バ」で表現されていると考えられるのである。

そうした点に言及する回答は、ほかにもある。それらにも耳を傾けてみよう。

〈話者 10〉「えー、そんなことするの」というときに、バーーー、と言う。バーーー　フツー　ソーイウコト　シナイネー。バーーー　ナンカチガウンジャナイ、というとき。何かやって違うものが出たとき、自分の意図と違う、意図に反することが起きたときに、バ、と言う。

〈話者 11〉変ったもの見たときに、アラ　バーバーバと言う。アララ　バーバーバー、という感じで。畑でいつも草が生えていないところに、取らないでいたら草が生えていたとき、ナント　バーバーバー　ソコサ　クサ　イッパイ　オガッテ。いつもと違う様子を見て、アレ　バーバーバー　ナンダイ　コノクサ　トンナイデ、と言う。

〈話者 39〉見ていて何か変なことやったりすると、ババババー、と言う。

〈話者 51〉バは、自分がこうだろうなと思っていたのが全然違ったときに使う。エーという感じで、バーと言う。例えば、待ち合わせをしていて、友達から電話が来て、車が壊れて行けなくなったというときに、バッと言う。また、うちの祖母が使うのは、部屋で飼っている犬がいて、気づかないうちにマーキングをしたときに、ババババババ、と言う。連発する。

〈話者 51〉ちょっと落としただけで割れてしまった場合は、ナンダベ　ワレテシマッタノスカ、ということで、バババババ、とか、バッ、とか言う。割れないと思っていたのに割れたら、バッ。

〈話者 56〉「えっ、何やってんの」という感じのときは、バッ、と言う。失敗したり、変なことしていたりする時に、「何やってんだ」という感じで、バー、とか言う。

〈話者 61〉友だちが変なことをしていたときに、バッ　ナニヤッテンダ、と言う。

以上、「バ」は、「自分の意図に反することが起きたとき」や「こうだろうなと思っていたのが違ったとき」に使用するのであり、予想と異なる事態に驚くことで発するものであることがわかる。「変ったものを見た」「変なことをしているのを見た」という状況も、想像を超える事態との遭遇を意味する。感覚的に「えー、そんなことするの」「えっ、何やってんの」という感じであるというのも、「バ」の使用状況をよく物語っている。これらの内省からは、「バ」が意外な事態を認知したときの驚きを表すものであることがよく理解される。

### (6) 感動詞「バ」の意味

ここまで検討してきたことをまとめてみよう。「バ」の意味に関る重要な点は次の 2 つである。

①「バ」は、反射的な反応によるものではなく、事態を認知した上で発する言葉である。
②「バ」は、予想しなかった意外な事態を認知したときに、その驚きを表す言葉である。

論述の順序に従い、①と②の 2 つに分けて整理したが、①は②に含まれる関係にある。その点では、②のみで説明が足りているとも言える。結局、「バ」という感動詞は、意外な事態を認知した際の驚きを表現するものであるということになる。わかりやすく言えば、「今、見聞きしたことが

らがあまりにも意外だったので私は驚いている」という意味が、「バ」に込められているのである。

## 4.「バ」の形態

### 4. 1. 基本形と実現形

ここまで見てきたことからも明らかなように、今回の調査で回答された「バ」のバリエーションは非常に豊富である。形態の種類の豊富さは、この感動詞について語るときに、まず、注目しておかなければいけない点である。

さて、それらの形態をどのように整理すべきか、ということが問題になるが、その点については次のように考えたい。まず、この感動詞の基本的な形態として「バ」を認める。そして、ババババやバーー、バーバーなどのさまざまな形態は、この「バ」がそのときどきの感情に応じて形を整え、実際の姿を現したものと考える。この、基本的な形態という概念を「基本形」と呼んでおこう。基本形は、いわば抽象的な概念であるから、「感動詞素」などの名称の方が適当かもしれないが、ここでは一応「基本形」としておく。これに対して、実際の姿にあたる概念を「実現形」と名付けることにする。実現形は、現実に発話された形態のことであり、語形と言ってもよい。また、基本形から実現形（語形）を導き出す操作を「語形化」と呼ぶことにする。

以上の関係を図示すれば、次のようになる。

| 基本形 | 語形化 | 実現形（語形） |
|---|---|---|
| 「バ」 | → | ババババ、バーー、バーバーなど |

ところで、意味の面については、前節で「バ」を「意外な事態を認知したときの驚き」を表すと結論づけた。この意外性の驚きという点はすべての実現形に共通するものであり、これを基本形に対応させて「基本義」と呼んでおく。この基本義に新たに何らかの意味的なものが加わって実際の語の意味が生み出される。この実際の意味を「実現形」にそろえて「実現義（語義）」と呼び、それが生成される操作を「語形化」になぞらえて「語義化」と言っておく。これらの名称の妥当性については十分な検討が必要であるが、とりあえず、以上のような考え方をとると、上の図に意味の側面を加えて次のように示すことができる。xは「バ」の基本義「意外な事態を認知したときの驚き」であり、α・β・γはその基本義に加わる何らかの意味を表す。

| 基本形 | 語形化 | 実現形（語形） |
|---|---|---|
| 「バ」 | → | ババババ、バーー、バーバーなど |
| ‖ | ‖ | ‖ |
| 〈x〉 | → | x＋α、x＋β、x＋γなど |
| 基本義 | 語義化 | 実現義（語義） |

さて、ここで明らかにすべき課題は、語形化・語義化の内実ということになる。語形化と語義化は、上の図でもイコールで対応させたように、ある一定の形式的な操作が、ある一定の意味を基本義に加えるという関係になる。ところで、先に、「バ」という基本形がそのときどきの感情に応じて語形化され、ババババ、バーー、バーバーなどの実現形となって現れる、と述べた。すなわち、実現形のバリエーションの違いは場面に依存した発話者の感情の異なりを表すということになる。そのことは、基本義が実現義に語義化される際に加わるのは「場面に依存した発話者の感情」であることを意味する。そのような「場面に依存した発話者の感情」を、ここでは「感情的意味」と称しておく。

### 4. 2. 語形化のシステム

語形化の操作は形態のバリエーションによって行われるのが基本であるが、イントネーション、ストレス、声の質などの音調的特徴も同時に利用されると考えられる。ここでは、形態面の操作を「形態的操作」、音調面の操作を「音調的操作」と呼んでおく。

さて、ここから、いかなる語形化の操作がどのような感情的意味の付加に対応するかを検討することになるが、その前に、実現形のバリエーションをひととおり見渡しておきたい。音調的側面はひとまず置いておき、特に、形態的側面から実現形を概観する。

全体を見渡すと、まず、基本形がそのまま実現形になったようなバ単独の語形が認められる。ただし、末尾に声門閉鎖音（glottal stop）を伴うので、これを、バッと表示する。このバッを「基本形形式」と呼んでおく。一方、バを連呼したり、引き伸ばしたりする語形も多く、その連呼の数や引き伸ばしの位置・長さの違いで実現形の種類が豊富に生産されていることがわかる。この連呼するという形態的操作を「重音化」、引き伸ばすという操作を「長音化」と名付ける。

以上のような観点から、回答された実現形のすべてを整理すると次のようになる。

**基本形形式**

バッ

**重音化単独形式（長音化なし）**

ババ

バババ

ババババ

バババババ

ババババババ

バババババババ

**長音化単独形式（重音化なし）**

バー

バーー

バーーー

バーーーー

バーーーーー

**重音化＋長音化（語頭）形式**

バーバ

バーババ

バーバババ

バーーバババ

バーババババ

**重音化＋長音化（語尾）形式**

ババーー

バババー

ババババー

ババババババー

**重音化＋長音化（語中・語尾）形式**

バーバー

バーバーバ

バーバーバー

バーバーバーー

バーバーバーバー

バーバーバーバーバ

バーバーバーバーバー

バーバーバーバーバーバー

バーバーバーバーバーバーバー

重音化と長音化について見ると、それぞれが単独で起こるものと、両者が組み合わさって起こるものとがあることがわかる。重音化について、「バ」が何回、連呼されるのか観察すると、上に示すようにさまざまな場合があるが、回答の頻度が高かったのは 4・5 回のケースである。この点は、何人かの話者からも、その程度の回数が多いとの内省を得た。一方、長音化については、1 拍から 4 拍までの間で引き伸ばしが行われるのが普通のようである。これらの形態の特徴については、次節で意味の問題と絡めながら、あらためて検討を行う。

### 4. 3. 感情的意味と語形化

あらためて、どのような語形化の操作がどのような感情的意味の付与に対応するか考えてみよう。今回の調査では、第 2 節に示した調査項目にあるように、あらかじめ、「驚き」「慌て」「落胆」と

いう3つの感情が表出される発話場面を設定し、そのような感情の違いによる実現形の異なりを見ようとした。もう一度、調査文を抜粋して示す。

質問 1. ぼんやりと歩いていたら、誰かに急に背中を押されました。そのとき、驚いて何と声を上げますか。【驚き】

質問 2. 驚いた拍子に、手に持っていた花瓶を床に落としてしまいました。花瓶は割れませんでしたが、水がこぼれてみるみる床の上に広がっていきます。そのとき、慌てふためいた感じで、何と声を上げますか。【慌て】

質問 3. それでは、花瓶が割れてしまった場合はどうでしょう。大事にしていた花瓶です。割れた花瓶を見て、がっかりした気持ちで、何と声を上げますか。【落胆】

これらの質問によって得られた語形は、それぞれ、「驚き」「慌て」「落胆」という感情的意味に対応する形式が回答されたものとみなしてよいだろう。もちろん、話者が設定された場面をよく理解せずに答えるというケースもありうるので、その点に注意しつつ検討を進めよう。

なお、質問1は「驚き」の感情としたが、「驚き」という要素自体は「バ」の基本義、すなわち、「意外な事態を認知したときの驚き」の中に含まれている。したがって、質問1の場面は、特に感情的意味が付与されず、基本義がストレートに実現義（語義）となる場合とみなしてよい。この関係を図示すれば、次のとおりである。

質問1：基本義 ＋ 感情的意味「 φ 」 の場合

質問2：基本義 ＋ 感情的意味「慌て」 の場合

質問3：基本義 ＋ 感情的意味「落胆」 の場合

以下、この3つのケースごとに見てみよう。

### (1) 基本義がそのまま実現義になる場合

質問1については、第3節で述べたように調査項目の場面からは少し外れた回答が多く得られた。すなわち、背中を押されて反射的に発するものではなく、押した相手を確認してから口にするものとして「バ」が答えられていた。しかし、その点は、ここでの感情的意味の検討の障害にはならない。そのような場面であっても、基本義 ＋ 感情的意味「φ」というケースとして扱うことができるからである。

**【回答一覧】**

さて、この場面での回答の一部は第3節でも取り上げたが、あらためて全体を示せば次のとおりである（例文や内省の得られているものはそれも載せてある。明らかに質問場面が理解されてないと思われるものは除いた）。

〈話者2〉バッ　ナンダベ。オラ　タマゲタヤ。

〈話者7〉バッ。

〈話者 12〉それは後で誰だかわかったときには、バー、と言うが、押された時には使わない。

〈話者 13〉バッ　オッカネコト。／バッ　アブネコト。

〈話者 16〉ババババ　ナント　ビックラコイタヤ。／ババババ　ナンダベ　イギナリ　コエカケテ　ビックラコイタコト。

〈話者 18〉バッ　ナニスンダベ。／バッ　コノヒト　ナニスンダベァ。

〈話者 23〉バー　タンマゲ゜ダ。

〈話者 27〉バッ　ナンダベ。／バババババ　ナンダビャー。／バババババ　ナンダベヤ　アンダダッタノスカ。

〈話者 32〉ナン　バッ　オメガ。

〈話者 37〉人に会ったときにはバッと言う。久しぶりに会った人、本当はそこにいないような人がいたときに、バッと言う。

〈話者 38〉回り込んでみて知っている人だったときに、バッ　ナンダベ、と言う。

〈話者 43〉バッ。

〈話者 47〉ウオッとびっくりして振り向いて、相手を見た瞬間に、バッと言う。振り向いてこの人だとわかったときに、バーーと言う。

〈話者 48〉バッ　ナニスンノー。

〈話者 57〉バッ。

〈話者 71〉バッ。

**【形態的操作】**

以上の回答一覧を見ると、ババババ、バババババ、バー、バーーといった語形も回答されてはいるが、バッという形式が圧倒的に多く回答されているのがわかる。これは、第 2 節に掲げた調査文にあるように、「バッ」という形式を例に挙げて質問を行っていることから、話者がそれに引かれた結果であるという恐れもある。しかし、録音で確認する限り、特に不自然な回答の誘導は行われておらず、また、上記のように話者の解説や使用例も得られている。したがって、この場面でのバッの使用は自然なものとみなしてよい。そうすると、この場面、すなわち、基本義 ＋ 感情的意味「φ」の場合には、「バ」はバ 1 音として語形化され、末尾に声門閉鎖音を伴ったバッという実現形となって発せられるのが基本であると考えられる。

**【音調的操作】**

バッの音調的特徴を観察すると、その発音にはストレスが付与され、力みを伴って実現されることが多い。また、語頭子音は強い呼気とともに発音される［$b^h$］であることがあり、ときに、ふるえ音気味の摩擦音［ß］として実現することもある。音声記号では、［$b^h$aʔ］ないし［ßaʔ］とでも表記するのが適当である。

**(2) 感情的意味「慌て」が加わる場合**

次に、質問 2 の場面、すなわち、落とした花瓶の水がこぼれて慌てふためく場面について見てみ

よう。回答は次のとおりであった。

**【回答一覧】**

〈話者 4〉ババババ。

〈話者 5〉バーバ　ヌレタベッチャ。

〈話者 7〉バババ、と 2 つ 3 つつなげて言う。あるいは声の強弱も利用する。

〈話者 9〉バババ、と言う。

〈話者 10〉（調査者：金魚鉢かなんかひっくり返したときには？）そういったときに、アババババ、と言う。

〈話者 11〉バババ　ナンダベー　キーツケタラ　イーノニ。

〈話者 12〉バババババ　コボシテシマッタヤ。ババババ、というのは、例えば、洗濯機の水が忘れて出しっぱなしになっているのを見たときに、ババババババ、と言う。

〈話者 13〉バババババ　コマッタコトシタヤー。／アラー　ババババ　コマッタヤ　ナントシタコッタベ。

〈話者 15〉ババババ　コボシテシマッタヤ。／ババババ　コボシテシマッタナ。

〈話者 16〉ババババ　ナゾシタライェーベ。水物だったら急いで処理しなければいけないから、その急ぐ状態が、ババババ、というように速くなる。

〈話者 18〉ババ　ナンダベ。アババ　コボシテシマッテ。たいへんであればバを余計に言う。下が立派な絨毯で醤油などこぼしたとき、バババババ、ぐらい言うかな。4・5 回くらいは言う。

〈話者 20〉バーババババ。バーバー。繰り返しの回数が多いほど、被害の程度が大きい。

〈話者 22〉ここに水をこぼしたとき、ババババ　ミズコボシテシマッタヤ、と言う。こういう場面では、バババのスピードも少し早い。

〈話者 26〉子どもたちがお湯なんかこぼしたときは、バーバーバーバーって言う。人がやったのを見て言う。バーバーバー。

〈話者 27〉ババババ　ナンダベー　アブネゴド。

〈話者 28〉ババババ、と言うかな。バーバババ。

〈話者 29〉ババババ。アリャー、とか。

〈話者 30〉慌てたときは、ババババ、と時々使う。

〈話者 32〉バババババ。

〈話者 37〉言うとすれば、バババババが合う。

〈話者 38〉オッ　ババババ。

〈話者 39〉（調査者：水がこぼれてみるみる広まっていくというときは？）そういうのは、ババババ、という感じだ。バーバババ。強調するときにはバを繰り返す。蜂の巣の大きいのがいっぱいあったときなど、ババババ、と言う。

〈話者 41〉アババババババ。こういうときは、ウッ、ていう感じで、バババババ、となる。

〈話者 43〉アッ　バババ、となるし、ババババ、と速く言ってしまう。私はよく使うが、バッ、

と言う感じで、バッ　コボレテシマッタ、とか、バババ　フカナクテ、とか。

〈話者 47〉その驚き度によっても違う。バの数が多いほど、たいへんな感じが強い。もしこれをこぼしたら、アララララララララ、となって、拭くときに、ババババババ。

〈話者 48〉バーバババ　マゲテシマッタヤ。バは連続する。何回でも言う。4・5 回。

〈話者 51〉ババババ　ナニシタベ。／ナンツコトスンダベ。

〈話者 55〉アババババ。

〈話者 56〉ババババ、と言う。バー、って。

〈話者 60〉言う。ババババー。

〈話者 61〉言う。こぼしたときよりも、ちらかしたときに言う。ババババー。物を持っていて、袋の中にいっぱい物が入っていて、それが散らばった時。水のときも言う人もいる。

〈話者 64〉バババババ。

〈話者 65〉アバババババ。バが多いほどやばい、重大な感じ。

〈話者 66〉ババババババー。バーバーバーバーバーバー。

〈話者 68〉言うかもしれない。ババババババ。

〈話者 69〉コップに注いだジュースを誰かこぼしたら、アババババババ、と言う。アババババ　ナニヤッテンダベ。（調査者：君が花瓶を持ってぼんやり歩いていて、花瓶を落として水がこぼれたときは言うか？）こぼれてしまったということを認識してからなら言う。アババババ。

〈話者 71〉たまに使う。ババババ。

**【形態的操作】**

以上の回答を見ると、〈話者 43〉のバッと〈話者 56〉のバーを除き、すべてにバを連呼する重音化が起こっていることがわかる（ここでも調査文の影響はないと判断する）。中でも、長音の入らないバババ、ババババ、バババババといった重音化単独形式が主流であり、これらが慌てふためく場面での一般的な「バ」の実現形であると考えられる。おそらく、バを引き伸ばさず、短く連ねる重音化の操作が、「慌て」という感情的意味の表出を担っているのであろう。この点は、「バババ、と 2 つ 3 つつなげて言う」〈話者 7〉、「急ぐ状態が、ババババ、というように速くなる」〈話者 16〉、あるいは、「強調するときにはバを繰り返す」〈話者 39〉、「バは連続する。何回でも言う。4・5 回」〈話者 48〉、といった話者自身の内省からもうかがえる。

話者の内省にさらに注目すると、バを連呼する回数の多さが事態の重大さや驚きの度合いと関わるという意識が聞かれた。「たいへんであればバを余計に言う」〈話者 18〉、「繰り返しの回数が多いほど、被害の程度が大きい」〈話者 20〉、あるいは、「その驚き度によっても違う。バの数が多いほど、たいへんな感じが強い」〈話者 47〉、「バが多いほどやばい、重大な感じ」〈話者 65〉といった内省がそれである。表現はさまざまであるが、これらは、バを連呼する回数が慌ての感情の強さと比例することを意味していると理解される。すなわち、感情的意味「慌て」はバの重音化（単独）によって表され、かつ、その感情の度合いは重音の数によって示されると考えることができる。

**【音調的操作】**

重音化単独形式の音調面の特徴に言及しよう。バの発音に力み（ストレス）があり、子音に強い呼気が加わることがある点は、前節で見た基本形形式の場合と同様である。ただし、この場合には、語頭のバに特にこの傾向が著しく、語末に向けて次第に弱まりを見せる。イントネーションは平板調か下降調であるが、下降調がとられることの方が多い。語頭を強く高く発音し、語末に向けて弱く低くしていくといった音調が最も自然のようである。こうした操作が、〈話者 7〉の言う「声の強弱も利用する」ということなのであろう。また、〈話者 16〉〈話者 22〉〈話者 43〉の内省にもあるように、重音化単独形式の発音はスピードが速い。まるで早口言葉のようであり、いかにも慌てふためいているといった雰囲気が生成される。上記の特徴と合わせると、重音化単独形式の発音は、あたかも機関銃の音のような印象さえ受けるものである。

なお、今述べた語頭を強調するという発音は、語頭のバがやや長めに発音される現象を引き起こす可能性がある。上記の回答の中に、バーバババという形式がいくつか見られるのは、そのためと思われる。このことは、バーバババのような重音化＋長音化（語頭）形式の場合、語頭の長音化は一種の生理的・物理的な現象として生じたものであって、次節の「落胆」場面に現れる形式のような意図的な操作とは異なるのではないかと考えられる。

### (3) 感情的意味「落胆」が加わる場合

続けて、質問 3 の場面、すなわち、大事にしていた花瓶が割れてがっかりする場面について見る。得られた回答は次のとおりである。

**【回答一覧】**

〈話者 1〉バーバー　イタマスィーゴトシタヤ。／ババババ　イタマスィーゴトシタヤ。

〈話者 2〉がっかりしたときは、バヤバヤと言う。

〈話者 4〉バを 4 回くらい繰り返す。バーバババ　ナンダベヤ。

〈話者 5〉悲観的な場合、バーバ　コワシテシマッタと言う。バー　コワシテシマッタ、は自分一人の歎き。

〈話者 9〉バー。バは 1 回だけ言う。

〈話者 10〉これは相手がやったときに、バーバーバーバー。

〈話者 12〉バー　ナントシタベヤ。

〈話者 13〉がっかりしたときには、アリャーー、とか、バーーーー、と言う。バーーー、バヤーーーとか。

〈話者 16〉バーバーバーバー　コレ　エライコトシテシマッタナー。／バーバーバーー　コレ　エライコトスタヤーー　ナゾ　スベヤーー。処置もさること、高価な物を割ってしまった後悔とごっちゃ混ぜになった言葉なのかと思う。誰か一緒にいれば、バーバー　ドースッペネー、と相手に対して助けを求める言い方になるかもしれない。

〈話者 16〉バーバーぐらいなら言うか。

〈話者 20〉バーーー、と語尾が落胆する感じで言う。

〈話者 21〉バーーーー、とひとつだけ言う。

〈話者 26〉アババー、と言うかもしれない。アーババー。

〈話者 27〉ババー　ナンダベ　コワレテシマッタヤー、と言うかもしれない。

〈話者 28〉バーー　ドースッペ、とか。

〈話者 29〉アバは言わない。バーだったら言うかも。

〈話者 30〉バーー、と言う。バー　ナゾスッペヤ。落胆した状態では、こう、バー、って下がる。

〈話者 33〉バーバーバー、と昔言ったかもしれない。バーバー　ヤッテシマッタ。

〈話者 38〉バーー。

〈話者 39〉ババババ。／ババババ　ドーショー。

〈話者 41〉バーーー、という感じですね。

〈話者 43〉バーバーバー。

〈話者 47〉バイヤ、と言いますね。バイーヤ。これは、バババより上の、なんてことをしてくれたんだ、みたいな感じ。自分がやったことに対しても、バイヤみたいな感じも言う。

〈話者 48〉バーーー、と伸ばす。1回ですね。ワレデシマッター、とかそのあとに付く。

〈話者 52〉使うかもしれない。バー　ヤッチマッタナー。

〈話者 53〉私は使わないが、バーー　ナジョニスッペ、という感じ。こういうときはバは続けない。伸ばす感じ。

〈話者 59〉言う。バッ、と1回だけ言う。

〈話者 65〉ババーー。

**【形態的操作】**

これらを見ると、まず、今まで現れていなかったバヤ、バイヤという形式が何人かの話者から回答されていることに気づく。この形式は、「バ」に他の感動詞が複合したもののようで、意味的にも落胆等のある種の場面に特化した形式であることが考えられる。詳しい検討は別の機会を待つことにして、今回は保留として置く。

それ以外の形式についてあらためて眺めると、〈話者 1〉のバババババ、〈話者 39〉のババババ、〈話者 59〉のバッを除き、すべての形式に長音化が生じているのがわかる。このことは、長音化という操作が、「落胆」という感情的意味を表現していることを示す。中でも、重音化が加わらない長音化単独形式が中心であり、バー、バーー、バーーーのように、バを意図的に引き伸ばすことで落胆の感情を表しているようである。バを単独で長音化させるという操作は、「バー。バは 1 回だけ言う」〈話者 9〉、「バーーーー、とひとつだけ言う」〈話者 21〉、あるいは、「バーーー、と伸ばす。1回ですね」〈話者 48〉、「バーー　ナジョニスッペ、という感じ。こういうときはバは続けない。伸ばす感じ」〈話者 53〉というように、話者自身も意識している。なお、どの程度伸ばすかについては、上記の例のように 1〜4 拍程度の場合が多い。話者の内省は得られていないが、長音化の程度は落胆の度合いと比例しているのではないかと思われる。

こうした長音化単独形式の次に多く回答されたのは、バーバー、バーバーバー、バーバーバーバ

ーのような、重音化＋長音化（語中・語尾）形式である。これらも、調査状況から見るかぎり、落胆の場面を正しく理解して話者が回答したものとみなしてよさそうである。「落胆」という感情的意味は、長音化単独形式のほか、重音化＋長音化（語中・語尾）形式によっても表現されうると考えられる。この場合も、バーの繰り返しの回数が多ければ多いほど、落胆の度合いも強いものと予想される。

**【音調的操作】**

これらの形式の音調面の特徴を見てみよう。まず、長音化単独形式について述べると、先に取り上げた基本形形式や重音化単独形式と異なり、ストレスや呼気はそれほど強くない。逆に、声に力がなく、いかにもがっかりしているという雰囲気を漂わせた発音になっている。イントネーションは、バー、バーーには平板調・上昇調の両方が見られるが、バーーー以上の長さになると上昇調に限られてくる。上記の〈話者 30〉の内省には、「落胆した状態では、こう、バー、って下がる」とあるが、録音を聞いてみると、話者の意識に反して実際の発音はやや上昇気味である。長音化単独形式の基本は上昇調だと考えてよい。ただ、緩やかな上昇もあれば、明確な上昇もあることは確かである。

バーバーなどの重音化＋長音化（語中・語尾）形式も、長音化単独形式と同様にイントネーションは上昇調をとる。ただし、語頭から語末にかけて徐々に上昇するというパターンのみでなく、例えば、バーバーバーーの最初のバーバーは平板で最後のバーーのみ高くなるといったパターンも観察される。その他、力のないがっかりした発声を行う点は長音化単独形式と同様である。

### (4) まとめ

以上、語形化の操作と感情的意味との対応関係について見てきた。簡潔にまとめれば、次のようになる。

**a. 基本義がそのまま実現義になる（特に感情的意味が加わらない）場合**

形態的操作：バ１音の末尾に声門閉鎖音を伴い、バッと発音される。

音調的操作：発音に力み（ストレス）が加わると同時に、子音に強い呼気を帯びることもある。

**b. 基本義に感情的意味「慌て」が加わる場合**

形態的操作：バを短く連呼する重音化の操作により、バババ、ババババ、バババババのような重音化単独形式が作られる。感情の度合いは、重音の数によって表される。

音調的操作：発音に力み（ストレス）が加わる。また、同時に子音に強い呼気を帯びることもある。この特徴は、語頭に特に著しく、語末に向けて次第に弱まりを見せる。イントネーションは平板調か下降調であり、とりわけ下降調が選ばれやすい。また、発音のスピードが速く、いかにも慌てふためいているといった雰囲気を生み出す。

**c. 基本義に感情的意味「落胆」が加わる場合**

形態的操作：バを長く引く長音化の操作により、バー、バーー、バーーーのような長音化単独形式が作られる。また、バーバー、バーバーバーのような、重音化＋長音化（語中・語尾）

形式が作られることもある。感情の度合いは、前者においては長音の長さ、後者においては重音の数によって表されると推定される。

音調的操作：声に力がなく、いかにもがっかりという気分を漂わせた発音をする。イントネーションは、平板調か上昇調であり、とりわけ上昇調が選ばれやすい。

ところで、以上の結論は、なお検討すべき点が多い。ここでは、限られた調査の結果から、「慌て」と「落胆」という2つの場面について考察したが、慌ては重音化によって、また、落胆は長音化によって表現されるということは言えても、その逆の、重音化は慌てを、長音化は落胆を表すということは単純には言えない。なぜならば、慌てと落胆意外の感情的意味をも、重音化や長音化が担っている可能性があり、さまざまな感情的意味について全体的に分析した上でないと、重音化や長音化の真の機能は把握できないと思われるからである。

例えば、次の回答を見ていただきたい。

〈話者10〉「えー、そんなことするの」というときに、バーーー、と言う。バーーー　フツー　ソーイウコト　シナイネー。バーーー　ナンカチガウンジャナイ、というとき。また、保育所などで、子供がおもらししたのを見て、バーーー、バッ、バーバーバー、などと言う。

〈話者11〉変ったもの見たときに、アラ　バーバーバと言う。アララ　バーバーバー、という感じで。畑でいつも草が生えていないところに、取らないでいたら草が生えていたとき、ナント　バーバーバー　ソコサ　クサ　イッパイ　オガッテ。いつもと違う様子を見て、アレ　バーバーバー　ナンダイ　コノクサ　トンナイデ、と言う。

〈話者60〉普通の会話をしていて、なんか、こうびっくり、初めて聞いたこととか言われると、バーーとか。（調査者：実演してみせてくれませんか。「この機械、6万もするんだよ」と言われたら？）バーーー。

これらは、その状況からして、「呆れ」や「困惑」の感情が表出された場面と考えられるが、ここでも、長音化単独形式のバーーーや、重音化＋長音化（語中・語尾）形式のバーバーバーなどが回答されている。また、次の回答も長音化形式が使用されているが、これらには「恐縮」の感情が込められているように感じられる。

〈話者8〉バーバー　ナントナント、と、何か贈り物を持って来てくれた年寄りに対して言う。ありがたい気持ちを出すとき。

〈話者38〉（調査者：お礼にも使いませんか？）そういう場合もあるね。バー　モーシワケナイコト。

一方、次の回答の重音化単独形式には、ある種の「歓喜」の感情が含まれているように思われる。

〈話者16〉しばらくぶりに来た子供たちに、ババ　ヨグ　キタコト、と言う。

このように見てくると、長音化は「落胆」のほかにも「呆れ」「困惑」「恐縮」といった感情と対応し、重音化は「慌て」だけでなく「歓喜」の感情とも結びつく可能性が見えてくる。そうなると、長音化や重音化といった形態的操作は、こうした個々の具体的な感情のレベルではなく、それらを統括するより抽象的で大まかな感情のレベルで機能するものであるのかもしれない。例えば、長音化は抑制された不安定な感情を、重音化は開放的で活性化した感情を表現する、といったようにである。また、そのように、形態的操作がより高次なレベルで機能するのに対して、音調的操作がより具体的な感情の機微を表し分ける役割を受け持っているとも考えられる。これらの問題については、またあらためて検討したい。

## 5. 文の特徴

最後に、「バ」が使用される文の特徴を取り上げることにする。幸い、今回の調査では、「バ」を使用した例文が豊富に得られたので、それらを整理しながら検討してみたい。なお、文の中での「バ」の位置はほぼ文頭に限られるということができる。文の冒頭で、バッ、ババババなどと声を発してから、次の語句を続けていくというパターンである。

今回得られた「バ」の例文には、主に文の内容から見て次のような種類のものがある。

(1) 状況描写文
　(1-1) 事態描写文
　(1-2) 心情描写文
(2) 評価表明文
(3) 非難表明文
　(3-1) 状況描写文・評価表明文＋疑問詞
　(3-2) 疑問詞文
(4) 困惑表明文

以下、この分類にしたがって見ていく。

### (1) 状況描写文

状況描写文には、認知した事態をそのまま描写するものと、それに伴って生じた心情を描写するものとがある。

#### (1-1) 事態描写文

まず、事態を描写する例文は次のようなものである。眼前で起こったできごと、例えば、水をこぼしたこと、床が濡れたこと、あるいは花瓶が割れたことなどを描写している。

〈話者 5〉バーバ　ヌレタベッチャ。／ババ　コワシテシマッタテ。／バーバ　コワシテシマッタ。／バー　コワシテシマッタ。

〈話者 12〉バババババ　コボシテシマッタヤ。

〈話者 15〉ババババ　コワシテシマッタヤ。

〈話者 18〉アババ　コボシテシマッテ。

〈話者 19〉バー　オトシタヤ。

〈話者 22〉ババババ　ミズコボシテシマッタヤ。

〈話者 28〉ババ　コボシタヨ。

〈話者 32〉バーー　ヤッター。

〈話者 33〉バーバー　ヤッテシマッタ。

〈話者 43〉バッ　コボレテシマッタ。

〈話者 48〉バーバババ　マゲテシマッタヤ。／バーーー　ワレデシマッター。

〈話者 52〉バー　ヤッチマッタナー。

〈話者 74〉バー　ヌレタベッチャヤ。／アバババ　ワレテシマッタ。マジカヨ。

### (1-2) 心情描写文

次に、心情を描写する例文は次のようなものである。目の前で生起した事態そのものではなく、その事態のために残念に思ったことや驚いたことなどを描写している。

〈話者 1〉バーバー　イタマスィーゴトシタヤ。／ババババ　イタマスィーゴトシタヤ。

〈話者 16〉ババババ　ナント　ビックラコイタヤ。／バーバーバーバー　コレ　エライコトシテシマッタナー。

〈話者 23〉バー　タ゛マケ°ダ。

以上の状況描写文を概観すると、基本的に次のような文型がとられていることがわかる。

「バ」＋ ～シタ・シテシマッタ（＋ヤ）。

文末に位置する終助詞の「ヤ」は、ある種のマイナスの心情を訴えかける形式のようであり、「バ」＋ヤ、の組み合わせで、驚きを伴った感嘆表現を作り上げていると考えられる。

### (2) 評価表明文

続いて、何らかの評価を表明する文も観察される。以下のように、もったいない、恐ろしい、危ない、申し訳ないといった評価の判断が示されている。

〈話者 2〉バーバババ　ナント　モッテーネーコト。／バーババ　ナント　モッテーネーコタ。

〈話者 13〉バッ　オッカネコト。／バッ　アブネコト。

〈話者 16〉ババ　ヨグ　キタコト。

〈話者 38〉バー　モーシワケナイコト。

これらの評価表明文に特徴的なのは、次の文型である。

「バ」＋ ～コト。

東北に多い「コト」止めの感嘆表現はこの地域でも使用されており、その冒頭に驚きの「バ」が配置されることで、驚きの感嘆表現が形成されている。

### (3) 非難表明文

非難表明文には、上で見た状況描写文や評価表明文に疑問詞が加わったものと、疑問詞文のものとがある。

#### (3-1) 状況描写文・評価表明文＋疑問詞

状況描写文や評価表明文に疑問詞が加わったものというのは、次に挙げるような文である。疑問詞といっても、具体的には、「ナンダベ」が多く、ほかに「ナンダイ」「ナントヤ」などが回答されている。これらは疑問詞が感動詞的に使用されたものと言える。

〈話者 2〉バッ　ナンダベ　オラ　タマゲタヤ。／バー　ナンダベ　ヒト　バガニスィタ。／バーババ　ナンツーコト　シタンダベ。ミライン　ボッコレテシマッタカ。

〈話者 11〉バババ　ナンダベー　キーツケタラ　イーノニ。／アレ　バーバーバー　ナンダイ　コノクサ　トンナイデ。

〈話者 16〉ババババ　ナンダベ　イギナリ　コエカケテ。ビックラコイタコト。

〈話者 19〉バーバー　ナントヤー　ソンナコトカタッテ。／バーバー　ソンナコトユッテ。　コマンデネーノ。

〈話者 27〉ババババ　ナンダベー　アブネゴド。／ババー　ナンダベ　コワレテシマッタヤー。

これらの文型は次のように示される。

「バ」＋ ナンダベ ＋ ～シタ・シテシマッタ（＋ヤ）。

「バ」＋ ナンダベ ＋ ～コト。

また、〈話者 11〉〈話者 16〉〈話者 19〉の発話に見られる「テ」止めの文型も特徴的である。

「バ」＋ ナンダベ ＋ ～シテ。

#### (3-2) 疑問詞文

非難表明文には、疑問詞を中核として文を構成する疑問詞文もある。いわゆる疑問文の体裁をとるが、実質、相手への非難表明として機能する。この例はかなりの数が得られた。対応する共通語で 4 つに分けて示す。

**「何だ」**

〈話者 2〉バー　ナンダベ。

〈話者 4〉バーバババ　ナンダベヤ。

〈話者 5〉ババババ　ツァッ(舌打ち)　ナンダベ。

〈話者 22〉バヤバヤバヤバヤ　オメサン　ナンダベ。

〈話者 27〉バッ　ナンダベ。／バババババ　ナンダビャー。

〈話者 38〉バッ　ナンダベ。

**「何をするんだ」**

〈話者 18〉バッ　ナニスンダベ。／バッ　コノヒト　ナニスンダベ。

〈話者 48〉バッ　ナニスンノー。

〈話者 51〉ババババ　ナンツコトスンダベ。

**「何をしたんだ」「どうしたんだ」「何をやってんだ」**

〈話者 12〉バー　ナントシタベヤ。／ババババ　オイ　ナントシタベヤ。

〈話者 13〉バババババ　コマッタコトシタヤー。ナントシタコッタベ　コマッタヤー。／アラー　ババババ　コマッタヤ　ナントシタコッタベ。

〈話者 51〉ババババ　ナニシタベ。

〈話者 53〉アッ　ババババ　ナントシタベ。

〈話者 61〉バッ　ナニヤッテンダ。

〈話者 69〉アババババ　ナニヤッテンダベ。

これらの文型を、代表的な疑問形式を選んで表示すれば、次のようになる。

「バ」＋｛ナンダベ／ナニスンダベ／ナントシタベ｝。

冒頭で「バ」と驚き、すぐさま疑問形式で相手への非難を表明するパターンである。

### (4) 困惑表明文

困惑した気持ちを表現するものである。これも疑問詞文である。具体的には「どうしよう」にあたる「ドースッペ」「ナゾスッペ」などが使用される。

〈話者 16〉ババババ　ナゾシタライェーベ。／バーバーバ　コイズ　ナゾシタライーベナ。／バーバー　ドースッペネー。／バーバーバーー　コレ　エライコトスタヤーー。ナゾ　スベヤーー。

〈話者 28〉バーー　ドースッペ。

〈話者 30〉バッ　ナゾスッペ。／アッ　バッ　ナゾスッペ。／バー　ナゾスッペヤ。

〈話者 39〉ババババ　ドーシヨー。

この文型を、ナゾスッペを例として示せば次のようになる。

「バ」＋ ナゾスッペ。

これは、「バ」と驚いたあと、すぐに困惑を表現するパターンと言える。

### (5) まとめ

このほか、

〈話者 8〉バーバー　ナントナント。

〈話者 49〉バッ　ソンナニ。

と、驚き呆れる文や、

〈話者 27〉バババババ　ナンダベヤ　アンダダッタノスカ。

〈話者 32〉バッ　ナン　オメガ。

と、確認・安堵する文などが得られたが、詳しい整理は省略する。

以上、今回の調査結果から観察された「バ」の文的特徴について述べた。まとめの意味で、文の

種類と代表的な文型を掲げれば次のとおりである。

(1) 状況描写文（事態描写文・心情描写文）

→「バ」＋ ～シタ・シテシマッタ（＋ヤ）。

(2) 評価表明文 →「バ」＋ ～コト。

(3) 非難表明文

(3-1) 状況描写文・評価表明文＋疑問詞

→「バ」＋ ナンダベ ＋ ～シタ・シテシマッタ（＋ヤ）。

「バ」＋ ナンダベ ＋ ～コト。

「バ」＋ ナンダベ ＋ ～シテ。

(3-2) 疑問詞文 →「バ」＋ {ナンダベ／ナニスンダベ／ナントシタベ}。

(4) 困惑表明文 →「バ」＋ ナゾスッペ。

今回の調査は質問場面も限られているため、以上の整理は「バ」が用いられるさまざまな文のうちの一部を紹介したにとどまる可能性がある。ただ、「バ」という驚きの感動詞が導く文であるだけに、全体に感情表出を主体としたものが中心となるということは言えそうである。

## 6. おわりに

以上、2006年度気仙沼市調査における感動詞「バ」について、意味や形態、文的特徴といった観点から整理してきた。今回の結果は、あくまでも設定した3つの場面における「バ」の使用についての回答を中心にまとめたものであり、感動詞としての全体像を記述することができたわけではない。しかし、共通語であれば多くの言葉を費やすことでしか表現できない内容を、感動詞「バ」ひとつを巧みに操ることで表す方言のユニークさについて汲み取っていただけたのではないかと思う。

今後の課題としては、より詳細な各地の用法の記述を行うとともに、地理的展開や歴史的変遷を明らかにし、アバ系感動詞の全体像を描き出していきたい。

## 注

1 これらの点については、これまで次の口頭発表で論じてきた。

澤村美幸（2008.3.1）「アバ系感動詞の分布と歴史」（基盤研究(B)「現代日本語感動詞の実証的・理論的基盤構築のための調査研究」（友定賢治代表）宮島ワークショップ）

澤村美幸（2010.6.12）「方言による古典語の再解釈－アバ系感動詞を中心に－」（第 7 回蛍池言語研究所公開研究発表会）

澤村美幸（2010.10.30）「感動詞の地域差と歴史－アバ系感動詞を例として－」（広島方言研究会）